

# 新型コロナウイルス感染防止のための研究室（実験室）利用ガイドライン

2020年5月25日

東京都市大学総合研究所

下記は、緊急事態宣言解除後に研究室での利用が可能になった時期を想定して、研究室や実験室を可能な限り安全に利用するための、注意事項をまとめたものである。感染防止のためにご活用いただきたい。

## 1. 研究室における教員・学生の留意事項

### 1.1 健康管理

- 教員・学生間で速やかに連絡が取れるような手段（携帯電話や SNS 等）を確保する。
- 通学時などで可能な限り三密を避け、ソーシャルディスタンスを確保する。
- 朝夕に体温を測定するなど健康チェックを行い、一週間以内に発熱や体調不良の自覚がある場合は登校しない。
- 研究室への入退室を管理する。学生はメールや Slack 等で入退室の日時を指導教員に連絡・記録する。
- 在校中に発熱した場合は、マスクを着用して速やかに帰宅する。
- 新型コロナウイルス罹患が判明した場合には、学生は指導教員に連絡する。指導教員は学生支援センターに届け出るとともに、学内や研究室における濃厚接触者を把握する。
- 罹患者のプライバシーを守り、差別や中傷を受けないように十分な対策をとる。
- 学生が高リスク者と同居している場合や持病を有する場合など、個別の事情に教員は十分に配慮する。

### 1.2 研究室や共用部分

- 複数の窓を開放して、定期的に換気する。（1～2時間毎に5～10分以上）。可能なら常時開放する。
- ドアノブやテーブルなど共用部分は定期的に消毒する。可能なら常時開放する。
- 入室時や食事の前には手洗いを入念に行う。しばらくは消毒用アルコールの入手が困難なことが予想されるので、石鹸による手洗いを徹底することは重要になる。
- スリッパは個人のもを使用する。
- PC のキーボードやマウスの共用を避ける。難しい場合には、使用前・使用後に消毒する。
- マスク着用を心がける。
- 研究室での作業の必要性を確認する。自宅でも可能な作業は自宅で行う。
- 学生の座席や共有スペースの座席が密にならないように、間隔を十分に確保する。スペースがない場合は、シフト制などで間の席を空ける。
- 共用スペースなどで対面の飲食を避ける。

### 1.3 研究指導やゼミ、遠隔コミュニケーションなど

- 一室に集合してゼミ等を開かない。
- 対面での会話は必要最小限とする。

- Zoom や Teams などのウェブ会議ソフトウェアなどの活用を進めて、教員学生間や学生同士の遠隔コミュニケーションを活性化するように努める。研究分野やテーマによるが、研究活動が活発になったとの報告もある。
- 自宅から通信している教員や学生の負担・プライバシーに配慮する。通信費用が高む、自宅の様子が映り込む、家族の会話が聞こえるなど。
- 新型コロナウイルス感染症の流行状況に応じて、研究計画を柔軟に調整する。
- 実験の延期などで研究を思うように進められない学生が進捗に不安をいだかないように、教員は状況に応じて達成目標を学生と相談するなどのメンタルケアを心がける。

## 2. 実験室の利用

### 2.1 実験室、実験装置の管理に関して

- マスク、消毒用アルコールを完備する。
- ビニールカーテンを使用し、学生の席や実験装置ごとに仕切りをする
- 実験装置ごとに利用ログノートを用意する。
- 学生ごとのスリッパ、室内履きを用意する。
- 可能な範囲で装置のリモート運転化を進める。(試料の取り付けなど、必要最低限の時間のみ実験室に滞在することが理想。)
- 実験室の換気もしくは空気清浄機による殺菌等を徹底する。
- 実験室内にて作業着を着用する研究室では、極力個人専用の作業着を用意し、それらはできるだけ清潔を保ち、定期的にクリーニングをする。
- 実験室内の装置や設備、特に共通設備(器具洗浄、試薬棚、乾燥機など)は頻繁にアルコール消毒を行う。

### 2.2 実験スケジュール管理

- 実験室内に多数の学生が集中することのないように、時間的に分散させ、同時に実験室内に滞在する学生数を極力減らす。
- そのために、研究室内の全ての学生の滞在時間帯、実験スケジュールを調整し、指導教員が管理する。
  - 誰が、どの時間帯に、何の実験をするか、どの装置を利用するか
  - スケジュール管理はなるべくオンラインで行い、全員で共有する。

### 2.3 実験室へ入る前に

- 体調に問題がないか、一週間以内に発熱はなかったか、現在発熱はないか、を必ずチェックする。学生同士でチェックし合うのもよい。
- 手洗い・アルコール消毒を行う。
- マスクを着用。より密集する実験室についてはフェースガード等も有効。
- その他必要に応じ、手袋、グローブ、保護メガネ、遮蔽着の着用を推奨する。

- 靴を履き替える場合は、個人専用のスリッパ、室内履きを利用する。

## 2.4 実験中の注意

- 各人が「3密（密閉空間・密集場所・密接場面）」回避に努める。
- 実験装置等は、誰がいつ利用したかを必ず記録に残す（利用ログノート）  
→感染者が出た際に、どの装置に触れたかを特定するために重要  
人と人との間を1m以上保つ。  
複数人が1m以内に接近して行う必要のある実験は極力避ける。  
→やむを得ず行う場合は、接近している時間を15分以内とし、適宜休憩を取りながら実験を進める。
- 実験装置等利用後は、素手で触れた箇所のアルコール消毒を行う。
- 頻繁に手洗い、アルコール消毒を行う。
- 実験に不必要な会話は極力控える。

## 2.5 実験が終了したら

- 実験室を出る際も手洗い・アルコール消毒
- 必要以上に大学に残らず、実験が済んだ後は速やかに帰宅する。
- 実験結果の整理・解析などは自宅でするようにしておく。
- 実験データの教員とのディスカッション等は自宅からオンラインで行う。

## 2.6 実験内容に応じた対応

- 無塵衣などを複数名で共用することは避ける
- 人を対象とする実験では、被験者と接触しないように、グローブや遮蔽着を着用する。
- 実験準備室など小部屋や温室などで三密にならないように注意する。
- 都市部での調査はラッシュ時の公共交通機関を避けた活動計画とする。
- 実験室内で、器具洗浄、試薬棚、乾燥機などの共通設備の動線に配慮する。

## 2.7 遠隔操作の工夫など

- 遠隔操作による実験装置のモニタリングやデータ保存システムの構築を検討する。他大学ではLabViewを用いた実現例がある。

以上